

Forest 群馬県森連時報 vol.501

【発行所】
群馬県森林組合連合会
前橋市上大島町182-20
TEL.027(261)0615(代)

【制作・印刷】
株式会社総合PR
前橋市元総社町936-4
TEL.027(253)8331(代)

INDEX

第87回通常総会	1~2	上原 又樹氏(碓氷川森林組合)	
森林組合生産性向上研修会	2	旭日単光章 受章	5
第1回森林組合販売担当者会議	3	人材育成・定着支援研修	6~7
森林認証の取得・普及をめざして 森林組合職員研修会	3	林業事業体初任者育成研修	7~8
楽器やヘッドフォンに県産材活用 利根沼田森林組合	4	JLC日本伐木チャンピオンシップ 横山氏(下仁田町森林組合) 入賞	9
労働安全対策会議(Web)	4	群馬県森連SDGs宣言	10~12
R4「緑の雇用」事業 スタート	5	あとがき	12

第87回通常総会

去る6月24日、県森連会館研修室にて、本会の第87回通常総会が開催された。今回の開催も新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、来賓等はお招きせず必要最小限の人数での開催となった。

主要な事業活動の内容は以下の通りである。

- 1) 全体の事業収益は対前年比5,639万円増の103%となった。うち指導部門では949万円減の85%、販売部門で6,685万円増の107%、加工部門で1,583万円増の103%、森林整備部門では1,679万円減の97%、当期剰余金が2,844万円となった。
- 2) 主要事業である販売部門のうち、共販事業は対前年比3,110㎡増の127%、買取販売の売上材積民有林システム販売(直送)事業は対前年比1,157㎡増の106%、渋川県産材センターの販売事業では、対前年比2,672㎡減の56%

となった。

- 3) 加工部門における渋川県産材センター事業では、製材品販売量412㎡減の対前年比95%であったが、加工チップ販売量は製紙用3,810トン(BDT)、燃料用18,472トン(ADT)であり、特に系統加工生産チップも加えた燃料用チップ販売量は53,907トンとなった。
- 4) 森林整備部門について、調査設計事業のうち森林調査は対前年比2,270万円減の74%、林道は237万円増の113%、治山は854万円減の95%となったが、全体として事業損益の向上に大きく貢献した。森林病虫害防除については345万円増の117%となった。
- 5) 購買事業について、事業物資で対前年比1,765万円減の90%、生活物資で242万円減の62%、皆伐・再造林の推進により苗木事業では612万円減の90%となった。



▲県森連 八木原会長挨拶



▲総会の様子

6)指導部門では、新たな系統運動「J Forestビジョン2030～地域森林の適切な利用・保全と森林経営の更なる発展に向けて～」の会員組合による運動方針策定に向けた指導・推進を行った。また、緑の雇用新規就業者推進事業やぐんま林業就業支援研修等の受託により人材育成や定着支援に務めた。さらに、木材サプライチェーンシステムの活用・本格導入に向け、課題整理や運用試験等を実施した。また、森林環境譲与税の有効活用や森林経営管理制度の推進に向け、市町村に積極的に働きかけ意向調査・森林調査・境界明確等を受託し森林組合と連携を図り実施したと報告した。

議事進行にあたり、村上利朗 桐生広域森林組合長が議長に選任され、令和3年度事業報告・貸借対照表・損益計算書・剰余金処分案・注記表及び付属明細書承認等に加え、新系

統運動方針「JForest群馬県ビジョン2030」が上程され、全議案が可決された。

最後に、永年勤続職員表彰、購買事業表彰、渋川県産材センター表彰が読み上げられ、総会は閉会した。

【永年勤続職員表彰】

山田 剛(20年)／佐々木奈美(10年)／徳田慎太郎(10年)

【購買事業表彰】

桐生広域森林組合／吾妻森林組合／利根沼田森林組合

【渋川県産材センター事業表彰】

烏川流域森林組合／吾妻森林組合

森林組合生産性向上研修会

去る6月9日に群馬県勤労福祉センターにて森林組合生産性向上研修会が森林組合系統及び県関係者ら計61名の参加で開催した。講師として株式会社SUBARU群馬製作所製造企画部の伊藤真司氏をお招きした。



▲株式会社SUBARU 群馬製作所 伊藤氏

この研修は、他業種における企業努力を参考にし、林業の生産性向上にどのようにつなげることができるのかを模索することを目的としている。

研修ではTPM(Total Productive Maintenance)を中心に話が繰り広げられた。TPMとは、生産に関わる全般に対して、あらゆる部門の全員が参加して、生産の効率化を極限まで追求し、ロスを発生させない仕組みを作る。という意味であり、安全・品質・納期・環境対応・人材育成・生産性のどれも大切であるという考えのもと、企業と社員一人一人が成長していくためのものである。

例えば、生産性だけに注力して、安全や人材育成をないがしろにしているのはどれも成立しなくなってしまうということであった。

TPMは人と設備の体質改善による企業の体質改善を狙いとしており、人を変え、設備を変え、その結果会社が変わる(風土・体質が変わる)というものである。安全で働きやすく、達成感が実感できる活気ある会社づくりをすることで、企業

目標が達成できる会社、お客様に笑顔をお届けできる会社に変える。利益が出る会社に変える。との説明があった。

SUBARUでは大赤字を出し会社存亡の危機に見舞われた際、〈従業員一人一人の英知を集結し、心を一つに黒字化を〉という意味のもと、TPMが導入されその後経営が上向いていったとのことであった。

最後に、物事を継続していくことの大切さ、世の中の変化に合わせて、常識を新陳代謝させていくことの大切さが語られ、研修会は幕を閉じた。

生産性の向上には安全対策や人材育成もしっかりしなくてはならないということは、まさに今の林業の課題でもあると感じた。労災が多いという現状があり、給料が低いという現状がある。現在の林業は偉大な先人により発展してきた。だが、今自分たちがいる林業をしっかりと見据えて見直していくことが、組織を存続させていくという点でも必要になってくるのではないだろうか。



▲研修会の様子

第1回森林組合販売担当者会議

5月13日、県内森林組合の実践的能力理事、森林経営プランナーおよび林産販売職員を対象とした第1回販売担当者会議を勤労福祉センター(前橋市)で開催した。

会議ではまず、県森連高橋指導部長が新系統運動方針と木材SCMシステムの活用について説明した。新系統運動JForest群馬県森林組合ビジョン2030の運動方針の項目2「循環型林業の確立と系統の木材販売力の強化」の中で、ウッドショックによる国産材需要の高まりと木材価格の底上げという好機に対応し、あらためて県内森林組合全体の素材生産量をめざすこととしており、共同販売としての民有林システム販売(協定販売)取扱量をさらに増大させることとしている。そしてこの生産・販売管理業務の精度向上と効率化のために、このたび開発したのが県森連クラウドシステムとしての県産木材SCMシステムであり、これを県内森林組合系統で共有し、需給マッチングと生産報告、月次生産書類や生産販売実績データのデジタル化をめざしていくことへの理解と協力をお願いした。

続いて群馬県林業振興課高山課長が、平成28年から令和2年までの5年間における、県内各森林組合の素材生産性と

生産費(皆伐・間伐別)について説明したうえで意見交換した。5年間平均でみると生産性は皆伐で9.0m³/人日、間伐で5.3m³/人日となっているが、この調査では労務単価の把握で福利厚生費を含んでいない場合等があり、組合間で差があるため、生産性は低くても生産費も相対的に低く抑えられている例があることや、生産費の対象となる工程の捉えが組合によって異なっていることがあるため、今後においてはこれら因子を整理、統一して把握する必要性があることを共有した。

最後に県森連鈴木木材部長と田村渋川県産材センター所長が事前に各森林組合から徴収した素材生産の当年度計画量と令和7年度と同目標、現場作業班員の推移等のアンケート調査結果を報告した。また、この現状や今後の目標をふまえ、各森林組合での現状や課題について意見交換した。生産性が向上しない原因や林産事業の労務確保と保育事業との両立、協力事業体の確保、活用や発注形式、森林組合間での業務連携等についてより具体的な意見や質疑がなされたが、今後とも森林組合系統内での情報共有を密にして県内系統一丸となり、系統運動としての素材生産量増大に努めていくことを確認した。

森林認証の取得・普及をめざして 森林組合職員研修会

森林認証制度は、生物多様性に配慮した持続可能な森林経営について、第三者機関が国際基準に照らし評価するものであり、この取得を通じてコンプライアンス遵守の組織管理体制と森林経営管理水準の高度化を実現でき、またこの取組はSDGsの実践そのものであることから、この度策定した新森林組合運動方針 JForest群馬県ビジョン2030でも項目5「国民生活及びSDGsへの貢献」としてこれを目指すこととしている。

県森連ではこの新森林組合系統運動の早速の実践として、7月26日に森林認証の取得・普及をテーマにした森林組合職員研修会をオンライン形式で開催した。

研修では県森連高橋指導部長が、全国及び近県の森林認証取得状況や県内の先駆事例である利根沼田森林組合での認証取得経緯や取得後の取組状況について紹介したうえで、今後各森林組合で認証取得申請する際に審査される「SGEC森林管理計画」で求められる経営方針や生物多様性に配慮した施業方針、水土保全と環境配慮等の具体的内容について説明した。

また、森林認証取得に向けた具体的なスケジュールや現地審査、費用負担等についても説明し、また森林組合で森林認証

取得する意義として、①役職員の意識向上とSDGsの実践、②競合他事業体との差別化、森林組合としての価値、③市町村の森林政策PRへの貢献等を挙げた。

既に森林認証取得している利根沼田森林組合笠原指導・林産課長からは、「SGEC認証取得により現場技能者にも浸透し、これまでのザツ、雑木を有用広葉樹として育成・活用しようとする意識が出てきている。労働安全対策もSGECの一環として実施している」等の報告があった。

県森連では、各森林組合におけるSGEC森林認証取得を支援(助成)する要領を制定したところでもあり、この内容についても説明・周知した。



▲web研修

楽器やヘッドフォンに県産材活用 利根沼田森林組合

利根沼田森林組合では近年、有用広葉樹活用の取組を強化してきており、このたび楽器(ウクレレ)やヘッドフォンの原材料としての提供を開始した。

ウクレレは国産ウクレレでトップシェアを誇る「三つ葉楽器」(前橋市)にスギ、ヒノキとともにヤマザクラの製材品を納入し、同社がこれを活用した県産木材ウクレレを製造・販売を始めている。

またヘッドフォンはタゴスタジオ(高崎市)が製作しているもの



▲県産材使用ウクレレ

で、利根沼田産のカエデ材が採用されたものだが、この際、試験的にコナラ、ヤマザクラ、クリ、クミについても提供している。

この他にも、家具材、集成材、フローリング材等についても供給オファーがあり、それぞれが求める品質や規格に順次対応を進めているが、利根沼田森林組合では県内では貴重なSGEC森林認証を取得していることもあり、各木材製品の付加価値を高めうるSGEC認証材としてPRし供給体制を整備していく予定である。



▲県産材使用ヘッドフォン

労働安全対策会議(Web)

新年度がスタートし、新規就業者の育成・指導や森林整備事業の実施が進む中、新たな系統運動方針にもかかっている「労働災害の撲滅」について、新規就業者をはじめ、現場従事者の労働安全意識や安全対策等の徹底を図るため「労働安全対策会議」を開催した。

本会議には、各森林組合の経営管理者や県職員ら29名が参加した。冒頭県森連八木原会長は、「系統をあげて安全対策にあたっていただいたこともあり、労働災害の発生数は減少しているが、新たな系統運動方針に於いて(労働災害の撲滅)をかかっていることから、新規就業者をはじめ、現場従事者の労働安全意識の向上や安全対策等の徹底を図り、より一層の労働災害防止対策を推進されたい」と挨拶した。

続いて、群馬県 林業振興課 林業担い手対策室 深澤室長より「少子高齢化が進展する中、数ある産業の中から林業を選んでもらうには、まず、林業が(安全な産業)になる必要がある、今

年度は災害原因で多い(かかり木処理)をテーマに巡回指導などを実施し、林業労働災害撲滅に向けて関係者の皆さまとともに、取り組んで参ります。」と挨拶があった。

会議では、県森連 梶川課長代理より「令和4年度における林業の安全対策の推進について」説明があり、改めて「チェーンソーによる伐木等作業の安全に関するガイドライン」及び「林業の作業現場における緊急連絡体制の整備等のためのガイドライン」の周知、同ガイドライン等に基づく安全対策の実施の徹底を図るよう注意喚起した。

また、昨年度の労働災害事例の中から2件について、当該組合の現場管理担当者より、災害発生状況やその後の対策等について報告いただいた。

この他、群馬県 林業振興課 生産力強化係 荒井主幹より近年発生した死亡災害事例について説明を受け、改めて労働災害の防止と安全対策の徹底を呼び掛けた。

高性能林業機械 レンタルします

● レンタルのニッケン



ザウルスロボ



フォワーダ



プロセッサ



グラブブル



ハーベスタ

R4「緑の雇用」事業 スタート

去る、6月1日に令和4年度「緑の雇用」新規就業者育成推進事業 フォレトワーカー(FW)1年目研修の開講式を実施した。

開講式では県森連 鈴木専務より「林業の労働災害発生率は全産業から見ても、とても高い産業であり、作業現場には常に危険が潜んでいるという事を十分に認識し、仲間、そして自分自身の安全を第一に心がけ作業や研修にあたって頂きたい」と挨拶があった。

また、群馬県林業振興課林業担い手対策室 深澤室長より「県内では充実した森林に対して素材生産業者が少なく、現場従事者も少ない現状で、新規に就業された皆さんは重要な担い手と言える、安全を優先に現場作業に従事して欲しい」と挨拶があった。その後、研修生の自己紹介が行われ、多くの研修生が「安全な作業を心がけていきたい」と力強く抱負を語った。

開講式後は早速集合研修の講義に入り、群馬県の森林・林業の概要など基礎知識などの講義行われ、フォレトワ



▲開講式 県森連鈴木専務挨拶

ーカー(FW)1年目研修は約25日間に及ぶ集合研修がスタートした。

2年目研修の集合研修(約24日間)については6月2日よりスタートし、1年目研修での基礎知識の確認とその応用の習得や林業作業に必要な資格取得が主な目的となる。3年目研修の集合研修(約21日間)については6月10日よりスタートし、基礎力の向上やかかり木処理・高性能林業機械を使用した林業作業の習得が主な目的となる。

フォレストリーダー(FL)研修については、令和元年度より本会が受託し、集合研修(約16日間)を7月1日よりスタートする。また、フォレストマネージャー(FM)研修は関東ブロック開催に参加するかたちとなる。

なお、今年度の本県の研修生数は、FW1年目17名、2年目22名、3年目16名、FL研修21名、FM研修3名となっており、6月1日から1月31日までの8カ月間にわたり研修に取り組む。



▲FW1(1年目)研修生

上原 又樹氏(碓氷川森林組合) 旭日単光章 受章

令和4年春の叙勲で、碓氷川森林組合 代表理事組合長上原又樹氏が旭日単光章を受章された。

これは氏の長年にわたる組合の経営安定に向けた取組、広域合併実現への貢献のほか、現在は主流となっている製材工場等への直送販売を県内でいち早く開始するなどの先導的な取組や、直送販売の効率化・安定化を図るための中間土場及び丸太選別機の整備など、木材供給体制構築への尽力などが高く評価されたものである。また氏は、新たな販路や需要の拡大目的とした丸太の海外輸出に着目し、民国連携により県内初の丸太輸出を実現させるなど、森林組合経営においても常に先を読んでおり、生産性向上や労働安全衛生の推進、人材育成など、地域林業の発展への取組みは枚挙にいとまがない。

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、本来、農林水産省で執り行われる伝達式にかわり、7月7日群馬県林業

振興課長から同森林組合事務所会議室において勲記・勲章が伝達された。

誠にありがとうございました。



▲碓氷川森林組合 上原組合長 受章

人材育成・定着支援研修

今年度も昨年同様に、人材育成・定着支援研修を群馬県の主催で実施した。本研修は「経営者・管理者研修」及び「指導者育成研修」の2種類からなり、前者は6月13日(月)の午後、後者は6月14日～16日、28日～30日の計6日間で開催した。

本研修は林業経営体の経営者・管理者や林業作業現場での指導者を対象としており、事業体に雇用されている新規就業者や若手現場技能者が能力を最大限に発揮し、やりがいや将来への期待を持って働けるよう、人材育成に関するスキルを学び意識改革をすることで、将来を担う現場技能者が誇りをもって働くことが出来る人材育成を内容とした研修である。また、Woodsman Work shop LLC代表の水野雅夫氏を講師として迎え今年度で6年目であり、過去の受講者から高評価を多くいただいている。



▲水野雅夫氏

【経営者・管理職研修】

県内の個人事業主を含む経営体から14団体、受講者16名で群馬県勤労福祉センターにて開催した。

研修では林業界で労災が減らない現状や、建設業に比べ林業の労災発生率が12倍もあること。また、新人は労働災害の発生可能性が高く、その期間は出勤すればするほど会社は赤字で、先行投資が人材育成に大切であること、さらに、新人の林業人生は最初についたコーチが重要であること。などが説明された。受講者からのアンケート調査回答では、「心に突き刺さった」「日本の林業について深く考えさせられた」といった満足度の高い意見が見受けられた。

【指導者育成研修】

今回も、講師の水野氏が開発企画に携わった『伐倒練習機 Felling Trainer MTW-01』を活用した研修を実施した。今年度は4経営体4名の参加で行われた。6日間の研修内容は下記の通りである。



▲経営者・管理者研修

＜研修1日目＞

林業は労災がいかに多いかについてから講義が始まった。特に、林業経験年数10年未満で死亡事故件数の33%を占めていること。さらに、人材育成は人の命を預かる大切な仕事であるとのことであった。人材育成により労災がなくなれば、メリット制度で労災保険料率が下がり、組織にとって大きな利点があること等が説明された。その後、実際の災害映像を見ながらリスクアセスメントを実施し、それぞれが意見を出し合った。午後には伐倒練習機を活用して、チェーンソー作業での受け口作成を『指矩(さしがね)』『レーザーポインター』『タブレット端末』の3つの道具を使って、現時点での研修者全員の技術レベル確認を行った。残念ながら今年度も、伐倒目標への受け口作成の精度が高い研修生は1人もいなかった。

＜研修2日目＞

「どのようにこういった言葉で新人に伝えるのか」ということをテーマに、受講者によるチェーンソー伐倒の際の受け口と追い口の説明発表と、それに対する指摘発表が行われた。実際に人前に立ち説明を行うとなると、「説明したい言葉が出てこない」「話さなければならない話が出来ない」といった声があった。また、指摘側では「具体的な数字があるとわかりやすい」「自分の経験談を交えていてわかりやすい」といった声があった。

その後、切捨て間伐の現場想定にて、木を伐倒した直後から次の伐倒木までの移動の作業を細分化し、時系列と優先順に並び替え、マニュアル化していくワークショップ「作業の分解と再構築」が開始された。

＜研修3日目＞

前日のワークショップをさらに進め、具体的な作業をそれぞれの意見をもとに優先順位をつけ、それを1つにする合意形成を行った。



▲新人への指導

＜研修5日目＞

実際に新人役に指導を行い、その行った指導に対しても改善点を話し合う。といった伐倒練習機を使った実践形式の研修が行われた。

新人に対する指導では「チェーンソーを持つ手の位置、左右どちらにどれくらい力を入れるか」「腰をガイドバーと同じくらい低くした方がいい」「右から左に切る際、お尻は水平移動する」といった多くの指導があり、具体的な言葉を使い、新人とのコミュニケーションが活発に行われていた。

その指導に対して「新人なので1度に伝えることは2、3個にしたほうがいい」といった意見があった。

人それぞれである感覚を伝えることに、苦慮しながらも自分の言葉で指導していた。

その後、ワークショップの続きが行われた。伐倒予定木の検討について話し合いがなされ、予定木周辺の密度の確認や予定木のツル絡みの有無の確認の優先順位が決定された。

＜研修最終日＞

ワークショップの最終仕上げとして作業が進められ、伐倒後に次の選木をし、受け口を切る直前まで作業の細分化が完了した。さらに、その中でもどの重要性が高いか順位付けをした。その結果、「伐倒後の倒木に人がつぶされていないか確認する」という項目が最重要項目となった。最後に、どのような思いで研修に参加したか、これからどんな思いで新人指導をしていくか受講者の発表が行われ研修は終了した。

受講者のアンケート調査では「本気でエネルギーを込めないと、本物にはならないのだなと痛感した」「一切の妥協がないスタイルは本当に感心した」といった回答があり、今後の指導力向上に向け有意義な研修となった。

チェーンソーをいつ置か、どのタイミングで落下物の確認をするか、といった内容では見解の違いがあり、意見を1つにしていく作業に苦勞していた。

午後には伐倒練習機にて受講者同士で技術の指摘をする研修が行われた。伐倒に対して高い精度が求められる水平切り及び斜め切りに対し指導を行い「腕の力だけではなく、体全体を使った方がいい」「腰をしっかり落とした方がいい」などといった指摘があった。何度も実践と指導を重ね、どの受講者も伐倒技術と指導技術が改善していったように思われる。

＜研修4日目＞

ワークショップの続きが行われ、選木、移動ルートの観察や決定、自分の安全確認、の優先順位が決められていった。個々の思う緊急性や目線、動線によって優先順位が前後したが、どうすれば一番安全か、という考えのもと1つの意見へと統一していった。選木については、暴れ木、うろ、腐りといった確認項目が多くあり、それぞれがどの位置にいるかによって見え方が全く違うといった内容が話し合われた。また、新人に指導する場合、どのような言葉かけが適切なかをまとめていった。その際、分かりやすく聞き取りやすい言葉を意識していた。



▲ワークショップ

林業事業体初任者育成研修

県森連では、群馬県林業振興課より受託した令和4年度林業事業体初任者育成研修を5月中旬から6月上旬までの合計6日間で対面形式とオンライン形式を織り交ぜ実施した。

この初任者育成研修は地域の森林づくりの計画や所有者交渉を行う森林施業プランナーや、木材の有利販売や事業体間の連携等を担う森林経営プランナーの候補者として就業された技術職員の技術及び知識の向上により、林業事業体の組織基盤の強化に資することを目的としており、昨年度に続いての開催となった。

今年度の初任者育成研修には8名(森林組合系統6名、その他林業事業体2名)の方に参加いただき、5月11日には勤労福祉センターにおいて対面形式での開講式により研修は

スタートした。

研修カリキュラム等は別表のとおりであるが、森林・林業にかかる基礎知識や関係法令、事業事務処理等の他、人材育成専門講師によるコミュニケーション能力向上研修や県外の林業事業体経営管理者の講演も実施した。このうち、講演については山梨県北都留森林組合専務理事兼参事田無双氏による「林業事業体の足跡と



▲県 林業担い手対策室 深澤室長

現在・今後の展開について」と題したオンライン講義であったが、北都留森林組合での能力評価システム導入等経営改革の取組や県域を超えた流域連携や異業種との交流等、たいへん示唆に富む貴重な感銘を受ける内容であった。

受講者の皆様には、今回の研修で学んだことを日々の実務で活かし経験を積んでいただき、森林施業プランナーの資格取得を目指すことを期待したい。

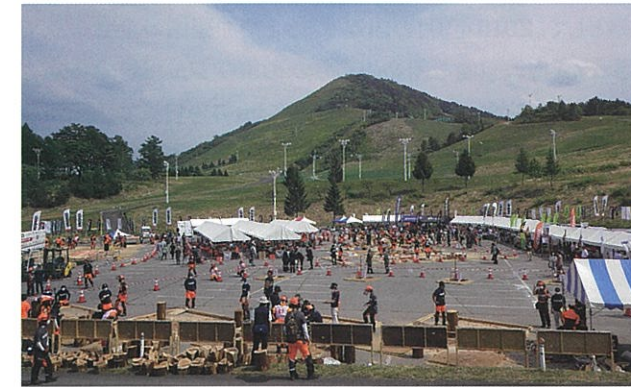
令和4年度 林業事業体初任者育成研修 日程・カリキュラム

Table with 5 columns: 日程, 時間, 講義項目, 講師, 備考. It details the schedule and content of the training program, including topics like forest management, safety, and group work.

JLC日本伐木チャンピオンシップ 横山 大蔵氏(下仁田町森林組合) 入賞

去る5月21・22日の2日間に青森県青森市のモヤヒルズで4年ぶりに「JLC 日本伐木チャンピオンシップ」が開催された。プロフェッショナルクラス・24歳以下のジュニアクラス・レディースクラスの3クラスに全国より過去最多となる97名の参加で行われた。

本県から7名が参加し、このうち森林組合系統から5名(下仁田町森林組合3名・桐生広域森林組合2名)が参加し、日ごろの現場作業で培った技術・技能を披露した。系統から参加した5名はプロフェッショナルクラスへ出場し、チェーンソー操作の安全性や正確さ、スピードなどを競い合った。



▲JLC会場(モヤヒルズ)



▲ソーチェーン着脱競技

初日の予選会では、簡易伐倒などの4種目の競技で競われ、プロフェッショナルクラス17名、ジュニアクラス3名、レディースクラス3名が二日目の決勝戦へ進出した。決勝戦は、伐倒、ソーチェーン着脱、丸太合せ輪切り、接地丸太輪切り、枝払いの5種目の競技の合計得点で競われ、下仁田町森林組合の横山大蔵さんが総合3位に入賞した。

横山さんを含むプロフェッショナルクラス入賞者3名、ジュニアクラス優勝者、レディースクラス優勝者の5名は、来年(2023年)4月にエストニアで開催予定の世界大会に日本代表として出場する。



▲枝払い競技



▲第三位入賞 横山大蔵氏(右)

Advertisement for Forest Insurance (森林保険) featuring a forest background and text: '森林とともに80年 森林保険 台風や集中豪雨、火災など万が一の災害に備えることができます。'

森林保険は、「森林保険法」(昭和12年法律第25号)等に基づき、森林所有者を被保険者として、森林についての火災、気象災、噴火災による損害を総合的に補償するものです。森林所有者が自ら災害に備える唯一のセーフティネットです。

〈保険金のお支払いの対象となる8つの災害〉

- List of 8 types of disasters: 火災 (Fire), 風害 (Wind damage), 水害 (Water damage), 雪害 (Snow damage), 干害 (Drought), 凍害 (Freezing damage), 潮害 (Tide damage), 噴火災 (Volcanic eruption).

お問い合わせは、お近くの森林組合、または森林組合連合会へ 群馬県森林組合連合会：〒379-2153 群馬県前橋市上大島町182-20 TEL：027-261-0615 FAX：027-261-0697

群馬県森連SDGs宣言

6月に行われた、通常総会では森林組合系統運動方針「JForest群馬県ビジョン2030」が決議され、群馬県の森林組合全体の10年後の夢・目指す姿とSDGs宣言が承認されました。またその中には、連合会としての運動方針とSDGs宣言も盛り込まれました。

そこで今回は、連合会として策定した群馬県森連SDGs宣言を紹介します。連合会の業務では、木材販売・木材加工・購買・林道治山の調査設計・組合指導等様々な分野の事業・取組を通じてSDGsの達成を目指します。

群馬県森林組合連合会のSDGs宣言!

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



持続可能な開発目標 (SDGs:Sustainable Development Goals) とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます (外務省サイトより)。

私たち、群馬県森林組合連合会では、以下のような事業・取組を通じて、SDGsの達成を目指します。

森林の適正な整備と災害対応



近年多発する豪雨災害を受け森林の持つ国土保全・水源涵養・土砂災害防止・温室効果ガス吸収、レクリエーション機能など、森林が持つ公益的機能への期待が高まっていることを踏まえ、健全で豊かな森づくりに向けた森林整備を推進して行きます。また、豪雨災害等により発生した森林土木施設被害の復旧対策に迅速な対応を図ります。

循環型林業の確立



伐採した山には必ず再造林を行うことで「伐って、使って、植える」循環を維持し、山の豊かさを保ちます。主伐・再造林施策の推進による、長期的な苗木需要に対応した優良苗木確保・供給体制の構築をはじめ、獣害対策にかかる関連資材やその他林業資材の提供など、系統購買事業の品質向上に努めます。

安心・安全な職場環境と高度人材の育成



風通しがよく、安心・安全な働きやすい職場を目指し、職員のエンゲージメント (幸福度、働きがい) が高まる職場環境づくりに取り組みます。専門的かつ有能な人材確保を努め、全職員の資質向上を目指すための研修会等への積極的な参加に努めます。また、キャリアデザインとジェンダー平等を考慮した人材の育成・登用にも積極的に取り組みます。

森林認証材の普及・啓発



会員森林組合での森林認証取得を推奨し、適正に管理された認証森林から生産される木材等の流通・加工を進め、消費者の安心・信頼に応える木製品の製造と供給を行います。認証材製品の積極的な普及拡大を進めることにより、森林・林業の成長産業化に寄与し地域振興や資源循環型の社会の実現を目指します。

森林教育・木育



赤城ふれあいの森を中心に、来場者のみならず学校・企業等への森林・林業に関する森林環境教育及び各種イベントを開催し、森林・林業の現状や「木を伐ること、木を使うこと」の大切さを老若男女問わず伝えます。森林や木製品に親しみと、森林・林業に関心や興味を持ってもらい、今後の林業の発展に繋がるような活動を進めて行きます。

バイオマス発電による脱炭素社会



渋川県産材センターを中心として加工する未利用材・低質材チップを、エネルギー利用として木質バイオマス発電所に安定供給することで、地域資源の有効活用を維持増進するとともに、化石燃料由来のエネルギー利用減少による地球温暖化防止対策にも貢献します。

環境と人にやさしい木質空間



我々が提供する木材製品により木造化・木質化を進めることで、環境にやさしく暖かな木質空間に包まれることにより心地よく木材の暖かみを感じていただけます。

また、木材を使うことによりCO2排出量をおさえ、木材自体が炭素を蓄えるため、木造建築は地球温暖化防止に繋がります。

スマート林業の推進



県産木材SCMシステムを活用し、需要と供給マッチング機能強化および流通販売業務の効率化と精度向上に努め、デジタル化による木材の生産・販売・流通の全体最適としての県産木材サプライチェーンを構築します。

スマート林業ICT関連企業と連携を図り航空・地上レーザーやドローン等の技術研究を進め、スマート林業による森林調査業務の効率化・生産性向上等に取組みます。

企業等のパートナーシップによる森林の持続可能性の確保



JA・生協等の協同組合とさらに広く連携・交流を進め、協同組合の相互理解の中で、森林組合事業と森林の多面的機能についてのPRを強化するとともに、協同組合の更なる発展と地域社会貢献活動を目指して行きます。

また、広く異業種から経営・生産・販売管理を学び、森林組合経営管理や施業生産性と木材販売能力向上等に資するための研修会や交流会等を実施します。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

1 貧困をなくそう	2 真水とエネルギー	3 すべての人に健康と福祉を	4 質の高い教育をみんなに	5 ジェンダー平等をすすめる	6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに	8 働きがいも経済成長も	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	10 人や国々の平等をなくそう	11 住み続けられるまちづくりを	12 つくる責任 つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を	14 海の豊かさを守ろう	15 陸の豊かさも守ろう	16 平和と公正をすべての人に	17 パートナーシップで目標を達成しよう	

SDGsの木製ピンバッジご購入のご相談をお受けしております

SDGs (持続可能な開発目標) とは?
 SDGsとは、Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の頭文字から生まれた造語です。
 2015年の国連サミットで採択された国際目標で、持続可能な開発目標として17のゴールと169のターゲットから構成されています。

あとがき

はじめまして。今年度より緑の雇用を担当することになりました徳田です。このあとがきも初めて書かせていただきました。緑の雇用は初めて林業に就業した方のための事業で、毎日の一瞬一瞬にやりがいを感じております。それとともに、緑の雇用を活用し就業された方に対して、どんなことが出来るか模索中でもあります。

さて、年度が変わり、新しく就職した皆さん、異動して部署が変わった皆さん、調子はどうですか？新しい環境では知らないことや覚えなないといけないことが数々あり、苦戦を強いられている方もいるでしょう。かくいう私もその一人で、毎日いろいろなことでも失敗したり、間違ってしまうことがあります。

しかし、日々の中の失敗や間違いといったものはとても大切なものです。どこをどうすればいいのか、何をすればいけないのか、失敗から学ぶことが多くあります。林業はケガや事故が絶えない仕事。大きなケガや事故を予防する。という点でも日々の失敗したことやヒヤリハットを次につなげ、それを成長の糧とし、大きな労災を減らし、共に林業を発展させていきましょう！

(徳田)

